

## 銀賞

過去の失敗から得た保全意識の芽生え  
富士フイルム静岡株式会社 富士宮工場  
浅沢 大助

---

私は「保全」が嫌いでした。正しく言い換えれば、過去に設備保全の嫌いな私がありました。私はレントゲンを加工する職場で働いています。レントゲンは直接光にふれると商品価値を失うので、私たちの生産現場は暗室工程となります。設備保全は月に一度工程を暗室へ切り替え、マシンオペレーター総出で行いますが、担当設備は“故障と無縁の高稼働マシン”であったため、私は自分たちの行う保全活動に対して、重要性や付加価値など見出せずにいました。また予防保全は、現場で手間暇を掛けた分の見返りや成果も少なく、私は「保全＝作業」と捉え、何の目的意識も持てずにいました。心のどこかで「私は物を作る人で機械整備はスタッフの仕事!」、「なぜ僕らが生産以外で油等で汚れる必要があるのか」という負の感情を抱いていたことも事実です。しかし最近になって、あれだけ順調だったはずのマシンが嘘のようにトラブルが多発しました。浅はかな自分の考え方を一掃せざる負えない事態に陥り、私は保全意識の重要性を痛感することとなります。それはこうしたフィルムシートを搬送するベルトラインで起こりました。幅方向に設置された 25 本のベルトが何の前触れもなく、次々と生産中に切れ始めたのです。初期症状が出た時点で「ベルト切れは劣化が原因。切れたベルトは新品へ繋ぎ換えれば良い」と故障を偶発的に捉え、後の生産を急ぐあまりに、ただの場当たり的な対処に留めたことが敗因でした。ある程度の時間が経つと、ベルト切れは順を追ったかのように同じ部位で瞬く間に切れ出しました。その影響で生産が滞る日が続き、私は自分に課せられたプレッシャーで、胃が痛む毎日に悩まされました。ようやく自らの手で真相を究明し決着に至るまで、実に 3 ヶ月という膨大な時間を要しました。その間で 25 本あったベルトは連鎖反応のように切れ続け、切れなかったベルトは僅か 6 本、実に 19 本のベルトが切れ続けるまで、私は故障を解決することができずにいました。

その理由は、そもそも自分の扱う設備に対して愛着も持たず、「保全はただの作業」と決めつけた私がそこにいたからです。原因解析の結果、1 本目のベルト破断が起こった時点で、他のベルトの負荷バランスが崩れ、ベルトライン

全体に生じた歪み（設備の悲鳴）が原因でした。

「もしあの時私が担当設備に愛着を持って機械の発した声（黄色信号）を自分の目や耳で真剣に汲み取る努力を行っていたら、結果はどうだっただろうか・・・」と、今は当時の行動を冷静に振り返り反省する私があります。「設備保全の在り方」や「自主保全士としての姿勢」を強く意識し、探究心を持って自職場の改善に積極性を持つことができたのはこの頃からです。私たちのようなマシンオペレーターは、日々の生産量を達成させるために設備を扱っています。また、私たちの会社には設備保全を専属で担当する保全マンが別にいますがこれを“分業”という言葉で分け隔て、設備のメンテナンスを人任せにすることが、果たしてベストな選択なのでしょうか。少なくとも、今の私は違います。普段からより近い距離で機械の正常状態を把握しているのは私達です。設備のコンディションを常に意識し、生産活動に必要なマシンの最大能力を常に100%の状態で維持し、管理することが私たちに求められる自主保全であり、これが生産効率をより高めるための、私たちのタスク(仕事)です。このような自身の発想転換を期に、私は「マシンキーパー」という役割を自ら志願し、日々の改善に取り組んでいます。暗室工程で視覚が奪われ、設備の正しい状態管理がしにくい問題などには、いかに暗室で有効な新たな診断機器が無いかと模索する毎日です。今では保全を終えた後、「また 1 ヶ月頼むよ！」と設備に声を掛けている私がおり、気付けば「保全嫌い」だったはず昔の私はそこにはもう居ません。